情は他人のためならず

「やまなし抄」　060513

元禄2年（1689）陰暦5月10日は朝から快晴の五月晴。芭蕉と曽良の二人は、松島から今のJR東日本仙石線に沿って石巻へと『奥の細道』の旅を続けていた。

好天に恵まれたために気温も上がり、鳴瀬川を渡る頃にはすっかり喉が渇いていた。そこで、街道脇の民家の戸をたたいて水を所望するのだが、「きれいな言葉」を話す旅人に臆したのであろう、いくら懇願しても人々は二人を警戒して水をくれない。

困っている二人に手をさしのべてくれたのは伊達藩の侍コンノ源太左衛門という人だった。彼は、自分の親戚が近くにあるから、そこで水をもらおうと、二人を案内してくれたのである。

これは推測だが、芭蕉一行が所望した「水」は飲料水ではなくて、湯冷ましのことだったのであろう。漂泊の詩人と異名をとるように、芭蕉は人生終盤の10年間をほとんど旅の空の下で過ごした。当時の衛生状態からすれば、旅で飲む水はきわめて危険だったはずだ。それなのにあれだけ旅を続けられたのは、頑丈な身体と、徹底した衛生管理がなされていたからに違いない。

芭蕉一行が、水が飲めなかったのは、単に街道筋の民家の溜め置きの真水が貰えなかったのではなくて、湯冷ましを作ってまで飲ませてくれる親切心が、土地の人々に無かったということなのであろう。

結局、芭蕉一行はこの地侍の親切で喉を潤すことができたし、お茶菓子などでもてなされもしたであろう。またこの源太左衛門氏は、石巻市内の旅篭「四平え」に紹介状を書いて、今夜の宿を手配してくれもしたのである。それなのに、芭蕉は『奥の細道』に次のように書いた。「十二日、平泉と心ざし、あねはの松・緒だえの橋など聞伝て、人跡稀に雉兎蒭蕘の往かふ道そこともわかず、終に路ふみたがへて、石の巻といふ湊に出。（中略）思ひかけず斯る所にも来れる哉と、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあかして、明れば又しらぬ道まよひ行。（後略）」

これでは、石巻の人々は浮かばれない。芭蕉がかくも非難がましく書いたのは、言うまでも無く「文飾」であって、あえて悲壮感を湛えようという計算だが、それにしてもこう書かせた遠因は、陸前街道沿いの住民の親切心に若干の瑕疵があったためであろうと推察される。

日本中、地域活性化を掲げて観光ビジネスを推進中だ。土地を訪れる「よそ者」へのちょっとしたホスピタリティーの大切さを『奥の細道』は教えている。地域の「ビジタ－ズインダストリー」は大丈夫かな？。